桃洞遺筆 第肇輯 巻上

爪七番 合三冊

特別
ニ1
4263
1

=1
4263
1

天保四年癸巳仲夏刻成

小原桃洞先生遺稿
同　蘭峽先生輯録

桃洞遺筆

初編
三冊

冀行書房　青藜堂
青霞堂
世壽堂

河北精舍
是齋文庫

桃洞遺筆序

桃洞小原先生家世以小官仕于吾　藩先生壯年志于本草之學從蘭山小野翁而叩斯道翁為竭其

四明直
藏書之印

蘊也翁嘗採草於日光及
熊野山中先生亦從焉其
學益進於是我
老公特命舉之始置本草
局從是先生日研夕究講

明諸家之本草草木蟲魚
必的識其形狀於是晦者
顯偽者真遂辨萍實別蘋
羊矣以故遊于先生之門
者自西自東日以夥也其

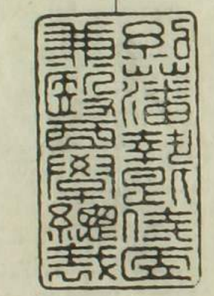
平日閱和漢羣書之間錄
其要正其誤或跋涉于山
野所目擊之異物乃識之
於紳遂為若干冊矣先生
篤行慎言不好以著述公

于世存之書庫以自娛耳
今其孫蘭峽生恐累月積
年為蠹朽搜其遺稿而欲
上梓來請余序余昔時從
先生而學焉今也訖處方

發藥不愆藥品之真價以
得起沈痾救篤疾者先生
之恩澤居多焉余雖不文
義不可得而辭乃書其由
以為序云爾時天保四年

癸巳上巳日

紀藩侍醫近藤好道識



八田庸謹書

宮内省圖書寮

古學ひをはゝめ。萬の道〻。その道
道の。道の隈なく。いひさゝゝて。
木のくれやゝ。鬱東那伎事なく。
美の事も物も。ものきゝうゝ成ぬ
るも。安御世の御世の御蔭ゝ
て。くゝふゝゝく加ゝゝく和も。ゝゝゝ

此書を見れば。ちゝ雲の千重
をおしわけ。天ゝ星宮紀高山。
見引の平底母許乃毛ホおひ
あてる木草をはしめ。あやした
巖 ゐるたち世ホめつらしき玉
石のゆゑよしもよくちられ大

海の澳方はるゝホ。嶋の崎〻
ホすむ魚苔。みるゝふとふ鳥。
野山ホはしる獸。谷地もさゝ海ホ
はふ虫。与こさらふ草蟹。宇ち
乃る磯能崎〻ホ。清らかなる貝つ
拍のいろ〻。人の えちゝぬくさ〻

の拙さら。よく考へ。よく知まへて。
佐太の浦浪。さゞ〳〵ふ ちゝを知
志るし多。そゝ本つふゝ桃洞
遺筆をいふのゝなゝ良直お
追つだの説ちゝ悉ふ山路、松明。
あゝふゝを引出て。いちゝろく

やゝ紀をゝへゝある。野洲の川水ゝやゝ
きゝくゝ所るまゝ紀事那つゝ。あゝれ
ゝ能人ゝ。なる郁子の。諾那ゝ得
て。班鳩北因可の池北。よろゝくゝも
此書ふよゝぬゝ所るまゝくゝ百
お保由れ。何那ゝ百ゝの此書や

何かおもしの此ふみやかく
ふる本居大平。
天保四年六月十五日

桃洞遺筆巻之一目録

燕子花　附杜若
井中養魚
縷絳草
日月殼　附海鏡
翠梅草
紫雲英
幽人筆
臭橘誤呼爲枳殼
抄攤
章魚舟介
海内一大石
海鯉
鵜　附鸕鷀
黒柿
代〻
鹿角芝

聖水
馬尾蜂
中秋具餅芋
金蛇　附銀蛇
對青竹　附對金竹
海獺

桃洞遺筆巻之一

紀伊　小原八三郎源良直　録

燕子花　附杜若

垣津旗も俊頼の萬葉草木異名集ハ顔吉花とあるを
うけゞゑし孝經樓詩話ハ我　邦ノ詩人カキツバタヲ
彼邦ノ燕子花ニ充ルハ誤ナリ然ルニ貝原翁ヨリ以
降ノ物産家モ皆此誤リヲ襲フ按ズルニ宋ノ桐郷ノ

朱輔ガ著ス溪蠻叢笑ニ燕子花花紫本畫作紫花全類於燕子生於藤一枝數葩トアリ生於藤トアレハ蔓生ノ物ナリ絶テカキツバタニ非ズ本邦昔ヨリ杜若ヲカキツバタト訓ズ謂ナキニ非ズ近比物産家杜若ヲヤブミヤウガニ充予却テ是トセズといひて錢起東坡馬臻などの詩を引て證とし杜若をカキツバタとせり予按ス此説却テ非なり漳州府志海澄縣志等ニ燕子花溪蠻叢笑云紫花全類燕子一枝數葩漳人名為紫燕とありて生於藤の三字を删れり此二書ニよりて燕

子花をカキツバタニ充べし直按ス怡顔齋の蘭品ニ三字漳州志及海澄志删之為是豈季公所言別是一種明陸恩豫本説薈云宋米輔字季公桐鄉人其花形相類偶得同名耶如紫燕則水草而非藤生也と いへり又明の夏旦が药圃同春三月の部ニ烟蘭即紫燕微香とありてこれを若水の結髦居別集ニ燕子花と併せて一ツ形狀をいたぶれが詳ならぬといへども紫燕の名ニよりて又燕子花の巢與花形微し建蘭ニ似て紫色なれば烟蘭と名づけしものと見て一物ともとるも可なるべし○杜若ハ文選の離騷ニ出る六臣注ニどふてもの何物ともしれぬ神農本經ニ杜若一名

杜衡とかいて爾雅に杜土鹵郭注に杜衡也とあると同名なるとして古人多相雑引用故九歌曰采芳洲於杜若離騒云雑杜衡與芳芷王逸輩皆不分別但云香艸也明の時珍が本草綱目蘇頌の説にいへる又宋の呉仁傑が離騒草木疏に諸家の説を引て杜若の形状を載と杜若をヤブミヤウガに充るい稲若水翁以降なり蘭山先生の本草綱目啓蒙考ふべし文繁きにしるす贅せず

直按に加キツバタ名義一ならば加茂真淵の冠辞考に萬葉の垣津旗い借字なり東萬呂の翔燕花てふ意とぞいたれしぐるさる形の花にはりそなといひ又或説に垣燕豆花と書べしといへり又伴信友がかきつばたの考ありこれい次篇にゆずりて

載ず

抄櫂

暖地の産ふしく薩州の西島佐多及び夜久嶋に多く産ず形鳳尾蕉に似り大なるい高さ丈餘周邊四五尺梢に葉出く叢生ず其葉い草蘇鉄或い齒朶の葉に

似て大なる莖長きもの五尺許もあり木理黒條數百交
糾して老紡線の如し其根ハ上ちも生じ初白く後黒
なる変じ幹と絡ふて漸くに大なるなる恰も巨き銅絲を
亂したるが如し切て門柱とし或ハ草木を植る盆と
も水土中に入て不朽水ぬけよく中に心ありて厚き
昆布に如きもの也菊座にあり中空なり土中に根ハ細
くして髪の如しふるるも亦今種樹家にあり唯ヘゴ
といふ薩州にてハ齒朶をヘゴといふ故に猶を鬼
ヘゴといへり直云ヘゴに二種あり幹の質細にして
硬きものを雄ヘゴ一名石ヘゴといひ

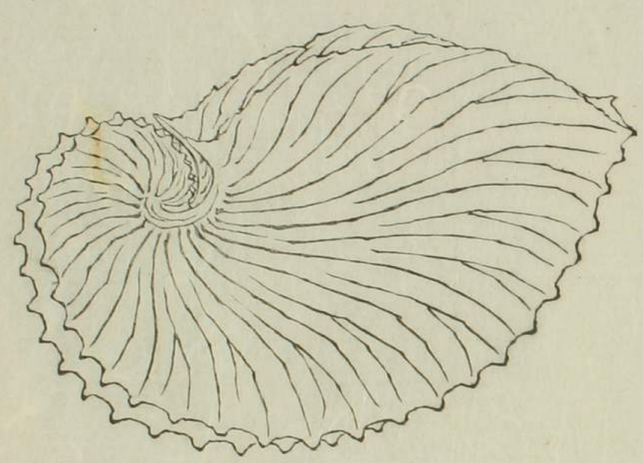
幹の質麁くして脆きものを雌ヘゴ一名アラヘゴといふ按に明の慎懋官が華夷
花木續考に叙州府志を引て抄欏葉長數尺如蕨葉狀
伐而削皮其形萬叢連絡如刻鏤といふ即是なり
直按に八丈嶋にてハ此抄欏をシダといふとそ
なり伊豆海島風土記に抄欏の圖を出して島名シ
ダとなるし近来薩州ヨリ出シテ世人水臺ナドノ
上ニ置キ草花ノ類ヲヤドシ植ルヘゴト云モノ是
ナリといへり

井中養魚

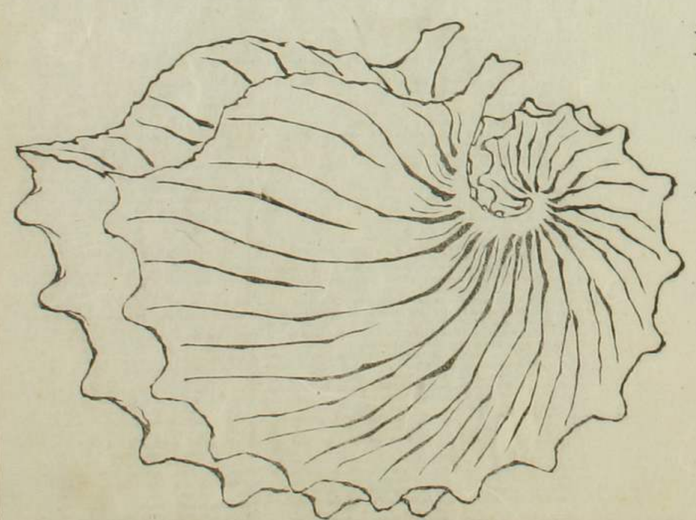
井中ニ魚を養ふこと也。明の徐光啓が農政全書ニ作
井底用木為下磚次之石次之鉛為上既作底更加細石
子厚一二尺能令水清而味美若井大者于中置金魚或
鯽魚數頭能令水味美魚食水蟲及土垢故也といへり。

章魚舟介

今玩介家ニ章魚舟といふ介あり又乙女介ともいふ。
大なる者ハ二尺餘あり。形葵介ニ似て肌白く文理粗
く幅狹く其口葵介より濶く恐ハ葵介と雌雄ならん。
この殼の中ニ一種の魚寄り居る。本州熊野ニて介章
魚といふ形望潮魚の如く白色ニして六足あり章魚
類の八足あるニ異なり。これを食られバ微毒ありて。
時〻腹痛をといふ俗ニ誤て八稍魚の寄居るものと。
ス故ニタコフ子ト名あるハ波濤静なるとキハ海
上ニ浮び出て両足を殼後ニ垂れて遊行ス若物ニ驚
けバさちまち身を殼中ニ縮て海中ニ入る。予先年熊
野大邊路の海上ニて游行のを社を目擊せり。按ニ明
の艾儒畧が曰有介屬之魚僅尺計有殼六足〻有皮如
欲他徙則竪半殼當舟張足皮當帆乘風而行名曰航魚



蛤介



章魚舟介

とこれ章魚舟形るべし〜直按ふ清の南懐仁が坤輿外紀に舡魚を作る清の陸次雲が譯史紀餘に舡魚を作る皆同文なり

縷絳草　直云或説ふ清の陸祚蕃が粤西偶記の錦屏松をもて縷絳艸に充るまうはべ〜

又甘字智朝顔大和本草といふ人家籬に延或は盆に栽て花を愛と三月に種子を下し四月に苗を生じ葉い纖線の如く青緑色形架上の蜈蚣に如く婆〻綿〻として蔓延て秋に至て葉間に花を開く五瓣にして牽牛花の如く大さ三四分紅色ふして麗し又白色もあり実に形亦牽牛子に似て小し按に清の翁摺菴が花譜百詠の注に一種統名蔦蘿者直按ふ瓊崑玉が類書纂要に蔦蘿寄生也と云るい蔦と女蘿の二物をいふなり花類胭脂葉細密如織翠極柔媚可愛沐雨充佳といふも此即是なり蘭山翁の花彙に松岡玄達の説によりて明の王仲遵が花史左編の藤菊一名棚菊に充るい非形り藤菊い予が著る花彙正誤に詳に載されば〻こゝに畧す

海内一大石

本州熊野古座奥の相瀬村山中渓側に有り土人一枚岩と呼ぶ予熊野採藥のとき此縄をもて量るに高さ

百十間横二百四十間餘壁立に享保年中に植村左平次松本蛇堂野呂元丈の三人台命を蒙て天下採藥に出て海内第一の大石なりといふと

日月殼　附海鏡

月日介は南海に多く産して大なるもの七八寸形正圓兩片ともに微凹なり一片は深紅色一片は潔白なり故に月日介といふ直云一種紅色の方に白圈點三ツあるものを三光介と云清俗に日月殼と云硯と云清の吳震芳が嶺南雜記に日月とのべいへり其文に曰海豊水族甚夥有日月者

大医博士深江輔仁の黒川道祐が本朝医考に醍醐天皇御宇延喜医関手世とあり一説には群書類聚中に收むる法曹類林殘缺の集平六年十二月侍医滋根輔仁云々とあるも同人なるべしといへり

蛤類也直按に清の馬俊良が龍威秘書中に收る本に蛤の字を蚌の字に作まるもやまり殼を大如掌而圓扁殼半片白半片紅土人直名之曰日月と有り○古説に寧波府志の海月一名海鏡を以て月日介に充るは誤なり直云順の和名類聚鈔深江輔仁が本草和名並に海月と水母と併せて一物とせし大に誤也海月は和名唐鏡介といふ船来和産ともに而其形圓くして薄く大なるは徑四五分外濶て内滑に色純白にして日に映ずれば紙の如く兩片相合て一片は平に一片は凹ふくして肉あり平なるもの粗皮を削り去て鱗次して燈に裝ひ以て紙に代て紙より明

あり。今琉球より此介にて張る朱間六稜の小燈を
来る雨中にたゞさへて損ぜず古く垢つけば灰
汁にて洗ふ新なるごとし。まゝ天窓とし故に燈篭介とも窓介と
もいふ。

直按ふ本草綱目に海月を玉珧和名タ[illegible]キの一名とし
て其附録に海鏡を出し二物に別り誤あり清の吳
儀洛が本草從新の注に明の屠本畯が閩中海錯疏
を引て曰海月形圓如月亦謂之蠣鏡土人多磨礪其
殼使之通明鱗次以蓋天窓嶺南謂之海鏡と此下に
本草以海月作江瑤柱誤矣といへり此説に從へし。

海鯉

本州海士郡雑賀崎浦に稀に釣採る形鯉と同くし
て唯腹に細赤條あり尾に至り大抵一尺許より
大なるいとゞ肉い鯉より柔にして味も劣れり按に
萬曆廣東通志の高州府土産の中に海鯉をのせて注
に恐らくは是なるべし。

翠梅草

螢草に一名瑠璃草同名多しまた玉カヅラとも螢カヅラ
ともいふ以上の四名橘保國が野山草にいづる大なるもの高さ一二尺

翠梅草

許葉ハ柳の葉ヨ似て厚く糙渋あり互生ど根ハ蔓と
形る四月五瓣の瑠理色の花を開く瓣の底白色ふ〜
て少〜紅色を帯る此草山野よも多く生〜て至て愛
をべき草ゑり然ども漢名未ど考ざり〜ふ近頃花
卉百種を閲とるふ此草の圖ハり翠梅といへり
直云花卉百種ハ我　官庫ヨハり僅一冊ヨ〜て花
卉百種を集めて圖とハ悉く設色を用ひて真ヨ逼
ゑり〜されど序跋もなく畫人の姓名を記さ〜ぜより
て先年　官より野呂伊石ヨをせさ多玉ふヨ明人

の畫がるべ〜とのゝいへり。

鵜　附鸕鷀

鵜の字古よりウと訓どるハ誤れり。鵜ハ鵜鶘なり。詩の曹風ハ維鵜在梁と呉の陸璣が毛詩草木鳥獸疏ハ曰鵜水鳥形如鶖而極大喙長尺餘直而廣口中正赤頷下胡大如數外囊好群飛若小澤中有魚便群共抑水滿其胡而棄之令水竭盡魚在陸地乃共食之故曰淘河と清の毛奇齡が續詩傳鳥名卷ハ曰鵜即鵜鶘水鳥別名洿澤又呼為淘河見郭注但其名淘河似鵜淘鶘河一聲

直按ハ陸璣ハ史傳なし正説邪続百川学海普拾遺芝草ハ唐人とハ誤なり詩經傳説彙纂ハ呉陸氏璣字元恪といい物理小識ハ陸璣非士衡監本爾雅及時珍皆誤作機といい四庫全書簡明目録ハ陸璣生於三国去古未遠といへり

轉耳若洿澤則又以潤澤取魚為義陸璣云莊子曰魚不畏網罟而畏鵜鶘或云以其能竭澤也と按ハ此鳥俗ハ伽藍鳥といふ京攝の間ハ偶來ることあり先年コンガラ鳥といふて觀場ハ供へ〜ものをとる形鵜ハ似て至て大ハ〜て全身白色嘴ハ長さ尺餘濶さ四寸許背の下ハ尺許の囊を垂る即ち胡なり去ハ〜常ハ縮りて居り水數外を入る小池の水をこへ出し魚を取て食ふといふウハ直云谷川士清の和訓栞ハウハ産の義也万葉集ハ水鳥を義訓せて其羽をもて産屋をふくこと神代紀ハ本草綱目をえ口訣ハ今産屋褥之易生とをえさり

の鸕鷀なり。其文は鸕鷀處々水郷有之似鴉而小色黑亦如鴉而長喙微曲善没水取魚日集洲渚夜巣林木南方漁舟往々縻畜數十令其捕魚といひ又同書は韻書盧與茲並黑也此鳥色深黑故名といひ唐の李延壽が北史倭國傳は氣候温煖草木冬青土地膏腴水多陸少以小環宋胡仔漁隱叢話作小玑掛鸕鷀項令入水捕魚日得百餘頭唐の魏徵が隋書東夷傳同文なりといひ明の余庭璧が事物異名は鸕鷀一名烏鬼蜀人云一名撲魚公呉俗云○古今類書纂要は撲魚鳥といへり。

烏鬼は諸説ありて事清王錫侯が字貫に見不さ

といへど此等の説は鸕鷀のウをさることと明らかなり。

萬葉集は鸕坂河鸕養る和名類聚鈔は辨色立成をぐゝ鸕の字を用ひさり。」引く大曰鸕鷀小曰鵜鶘と大小はて別の説あり甚ぐ誤なり唐山はても鵜と鸕鷀とを混せ〳〵誤あり清の徐士俊が三百篇鳥獸草木記は鵜淘河也一名鸕鷀又名烏鬼杜詩所云家々養烏鬼頓々食黄魚者是也といへり。

紫雲英

蓮華花は一名蓮華草又ゲンゲ花京ホウザウ花筑紫といふ野生甚多し三月花を開く紫白の二種あり小兒

其花をくゝるをかりめて玩弄を其葉嫩きとを食ふべ
し或い其莖葉を馬を飼ふてを芥子園畫傳を圖をる
處の紫雲英一名荷花紫艸をして明の高濂が草花譜
ふ紫花兒遍地叢生花紫可愛柔枝嫩葉摘可作蔬春時
子種といふもの是ハ直按松岡玄達が食療正要を紫花兒を挙蔞菜を充るい
誤なり挙蔞菜ハ本草綱目を載る通泉草なり」古説を本草綱目の半邊蓮或
い明の王西樓が救荒野譜の碎米薺一名碎米柴本草雜艸
部をくゝる蓮華草を充るいゐしゝ形らゞ半邊蓮ハ和名ハタ
ケムシロ一名レンゲツル碎米薺ハ和名タガラシ一名カハタカナといふものを充べ
し

黒柿

大明一統志及び明の鄧景南が一握坤輿の徽州府土
産門を柿心黒木をのをこれ黒柿形るべし

幽人筆

奥州仙臺を末の松山の松蕤と宮城野の胡枝花莖
とともゝ筆管を造る此二筆ハ仙臺の名品形り直云
備前の登々井の古詩韻範を清人朱綵地が肥の長崎
を来りてはくきる此二筆の賦一篇を附せり宮城野
萩壽衛山松二筆賦以題為韻と何りをるへし○本邦
を萩の字ハギと訓どその誤きをること久し詳を
次篇を出ル松蕤を造るものハ幽人筆形り唐馮贄が雲

仙雜記ニ汗漫錄を引て曰司空圖隱於中條山芝松枝為筆管人問之曰幽人筆正當如是

代々

今春盤ニ供へるダイくは二種ありて一ハ其蔕五瓣梅花の如く其下ニまるく圓蔕ありて蔕二重なりこれ真物ふくて明の黃仲昭が八閩通志ニ載る四青橙なり一名唯一蔕なり俗ニカブスといふこ按真物ニはなど清の陳淏子が秘傳花鏡ニ載る臭橙なり」代々ハ和名なれども唐山ニも出れど清の胡雲客が日本篇ニ櫻桃芍藥爭珍葩海棠垂絲代々久と注ニ代々花名結子不落青黃遞變といへり」本邦の俗代々を橙或を臭橘次ニ本條ありニ充ること誤なり唐山ニて古へ橙とのみいへど本邦の九年母なり明の王蓋臣が群芳譜ニ香橙といふ今單ニ橙といへば多く惣称ニ係る又舜水朱氏談綺ニ橙をユズとし柚ハ上ニくびくめなりて紅白二色あることといふこれハ本草綱目ニ柚と朱櫞と同類なるをもて誤なを柚一名朱欒といふ舜水この誤を知襲ふこ柚を朱欒香櫞の類とし紅といふ

ふい香藥中の上品内紫をさしたるゝ此説南寧府志嶺南雜記なども有り。從ふべからず。

臭橘誤呼為枳殼

本草綱目の拘橘一名臭橘い和名唐立といふ今俗ゝ誤まりて枳殼といひ人家ゝ多く植て藩籬とし枳殼垣といふ。唐山なども此誤り有り清の陳復正が幼ゝ集成ふ。枳殼鮮者更妙。即臭橘子是也樹名鐵籬笆鐵籬笆ゝ一名也説嵩ゝい多刺而鞭人家菌塹多植之以禦宵人鐵籬塞といふ。拘橘樹の者といへり。

鹿角芝

鹿角芝

文化元年甲子の夏本州熊野新宮より異芝を出す長さ七寸、幅五寸許一根ゑ二三莖岐ありて鹿角の如く微し匾し紫赤黒色あり、光澤ありて漆ぬて塗が如し、恰も靈芝の質と同じ、岐頭も圓くして深黄色根莖ともゑ堅硬形り其後伊勢の山中よりも出るといふ。按ゑ、清の廖百子が正字通芝の字形下ゑ或如鹿角といふもの即是形り。

聖水

七月七日鷄鳴ゑ至る井華水を汲て古器を洗へば油膩を去ること妙形り寅卯辰の刻ゑ至りて其效漸々ゑ少し又俗ゑ此水を貯へ置て久く敗さぬ痺瘡ゑ傳て佳形ること臘雪水ゑ同じといふ。本草云臘雪これ水抹痺良を聖水と名くべし、清の屈翁山が廣東新語ゑ曰廣州人毎ゑ以七月七夕鷄初鳴汲江水或井水貯之是夕水重他夕數斤經年味不變益甘以療熱病謂之聖水亦曰天孫水若雞二唱則水不然矣廣州竹枝歌云七夕江中爭汲水三秋田上競燒鹽　南海縣志ゑ曰七月七日早汲

水貯之經年不敗諺謂之聖水

直按ふ聖水同名多〳〵彙苑詳註明の王世貞撰とふ。李德裕が傳を引て載る聖水○清の陸次雲が八紘譯史天竺國の下ふ載る聖水○荆州府志ふ載る太平山の聖水井各別なり」又清の尤展成が外國竹枝詞瓜哇國の下ふ新村市舶聖泉清と注ふ新村番名革兒中國人所居海灘有小池名聖水元將高興史弼征闍婆明の陸伯生が廣輿記ふ爪哇國古闍婆國と云り。之水拜天禱祝揷鎗地上隨涌出といふい本邦壺井の清水と同日の談

邪里。此說本い明の費信が星槎勝覽馬歡が瀛涯勝覽集るどふ出る。高興史弼い二人なり。拜天の上ふ二將の二字何い。

金蛇　附銀蛇

金蛇い本草綱目ふ出て一名金星地鱔といふ本草啓蒙ふ金蛇いキヘビ黃色ノ蛇ヲ云日ニ映ノ光アル故ニ名クといへり。予按るふ真の金蛇い此キヘビふいらざるべ〳〵キヘビふ本州ふも稀ふ產ル形常蛇と異ることなく大抵長さ二尺餘總身黃色ふして微〳〵黑色を帶び日ふ映どれが光何りと雖清の陳鑑が

江南蛇品に載る黄蛇あり、真の金蛇にあつるべきも
のいまだ見ず。
直按に唐の蘇鶚が杜陽雜編に載る黄金蛇い何物
の出るべからず、又朝鮮の許浚が東醫寶鑑の土挑
蛇清の王士正が隴蜀餘聞の黄連蛇とに黄色の蛇
にして和産詳らかならず。
○銀蛇一名錫蛇これ亦本草に出る、啓蒙に銀蛇シロ
ヘビ、一名カナヘビ、佐州此品稀ナリ、豫州ニハ多クア
リト云フといへど、按に白ヘビに二種あり、一い常蛇

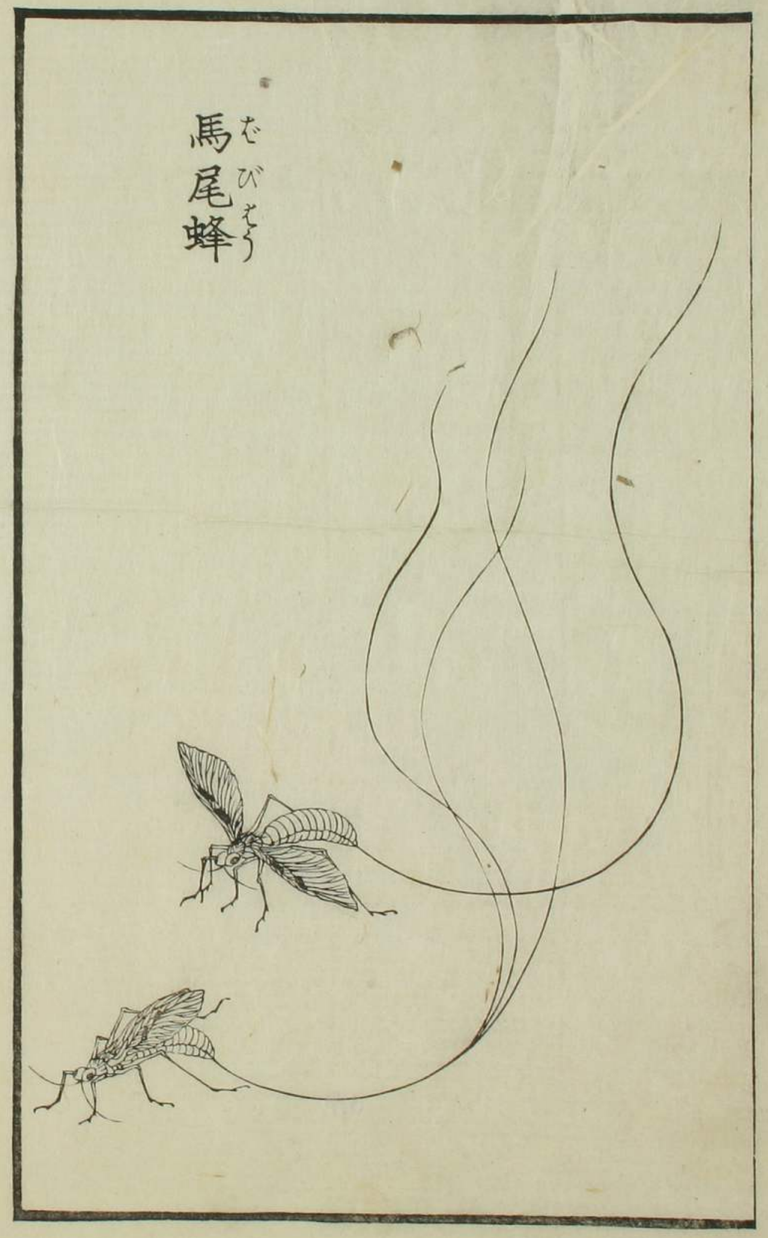
の變じて白色に形るものなり、一い至て稀なり、文化
甲戌の秋七月廿六日、ある人本州雜賀川に遊ぶ、水中
忽白光あり、杖をもて探りとるに白ヘビなり、予に鑒
定を乞ふ、予真の銀蛇とは其性緩にして人を恐れず、
長さ二尺八寸、全身白色にして鱗間悉く銀光あり、頭
い常の蛇と異にして扁く、鱓に似て縱横に赤黄色の
條五六あり、眼い黑く眼邊黄にして舌白し、凡て蛇の
類い臭氣あるものなるに、此蛇少しも臭氣なし、捕へ
人これを我　西殿に獻る、此を畜ひめ、に蛙及び

種々の生物を食ふ。二年の後死す。又先年本府の東南庚申堂にて観場に備る者あり。長さ五尺餘。全く白粉を傅るが如く。小黒斑あり。頭は鰐に似て目は灰青色。舌は灰白色なり。後衣を脱て潔白銀光なり。これ真物なるべし。其後予熊野採藥のとき北山組の山中にて白蛇をとること両度あり。捕へ獲ることを得ざれば真物か変生か知べからず。又肥前佐賀脊振山俗に辨才岳といふにて毎歳四月辨才天の祭に白蛇出ることあり。これ亦真の銀蛇なりといふ。然ども予いまだこれを得ざれば其真偽定むべからず。又和名に銀蛇と呼ぶ者は大腹皮中の小蟲にして甚稀なり。長さ二三寸。濶さ一分許。蛇の形にして首は龍の如く。體に小鱗あり。全身銀色。首は微紅なり。嘗て聞く。先年阿州にて草綿の中に二尾を獲るものありて。阿州侯に献ずるといへど其實否を知らず。

馬尾蜂

馬尾蜂は本州にて枯朽する朴樹の中に多く生ず。

馬尾蜂



性懶惰なゝて高く飛ことなしとぶ形穉蜂に似て小く黄赤色なゝて翅ハ穉蜂に同じく黒斑あり尻の尖に長さ六七寸許の尾毛一本あり色黑く死る時ハこの尾三筋に分きて半旋巻を先年山城嵯峨の奥にて薪を裂て其中より多く飛出ることなり此蜂漢名詳ならず疑ら本草綱目に載る獨脚蜂の屬なり獨脚蜂ハ友小原桐山獨脚蜂記を著して龍骨一家言の附録にのせよりてこゝに畧す

對青竹　附對金竹

金銀竹ハ一名金竹京の金竹同名あり明の周文華が汝南圃史に金竹幹色純黄似金と

いふ。廣東新語の黄皮竹は。本州より黄竹といふ。對青竹の溝も黄色なるものあり。本草啓蒙は薩州ニ金竹アリ。黄ニメ青色ナシ。節間長サ二尺又筋竹種樹許笛ニ作ルベシとあるか。予未ざるべし。

筋竹も亦同名あり。本州有田郡山保田山中ニ。方言スヂ竹と呼もの。産ニ開女竹ニ似て。質白粉を傅るごとく。竪ニ青色の條六七あり。こゝ後臺灣府志附考ニ臺海采風圖を引て。七絃竹幹白。有青線紋五六七條葉與竹同といへるの類なるべし。又漢名の筋竹を。長サ二丈許圍數寸至堅利。南土以為弓其筍味成竹時堪成弩絃と。晉の戴凱之が竹譜ニ見えたり。これも大名竹なり。これ亦同名さりとこれい和産詳ならざる。大和本草ニ。大名竹和名ナリ。節間長ク。赤黄ノ條アリ。竹柔ニ不堪為器用とい。漢名詳ならず。又臺明竹と書とき。隅州噌郡清水山のともキンメイ竹本草と正偽名竹ふして。同音異物なり。

もいふ。竹の質黄色なして。溝の處緑色の筋あり。宋ち

越滑が養痾漫筆ニ成都古今記を引て曰。對青竹。竹黄而溝青故毎節若間出云此竹今浙中亦有之惟會稽頗多彼人呼為黄金間碧玉直按ニ宋の許懽が東明の謝齋記事亦同文なり。在抗が五雜組ニ曰。有黄金間碧玉竹其節一黄一碧正直如界然と清の方以智が物理小識ニ曰。成都黄竹溝青と是等皆金銀竹なり。又一種竹の質緑色なして溝黄色のものあり。こゝ後い黄金間碧玉竹の如く多きなしこゝ後も國ニよりて金銀竹といふ明の王世懋が學圃雜疏ニ曰。金竹中尤美者曰黄金間碧玉色澤殊常中

界一道綠尤可愛有二種大者曰碧玉間黃金稍不逮然
與黃金竹相對發一不可余園中俱不乏直按ゑ明の馮
學海明の陶珽が續說郛等ゑ收むる學圃雜疏ゑ畧本
ある竹の事を載ど明の高寄齋訂正の廣秘笈中の
本ゑ即ちこの碧玉間黃金竹ゑり又對金竹ともいふ
宋の張禮が遊城南注ゑ曰韋中伯園中有對金竹其狀
與對青相似直按ゑ清の陳元龍が格致鏡原の長安有
小本ゑ似の字を反の字ゑ作る
此竹者惟處士蘇季明張思道與中伯三家而已

中秋具餅芋

中秋ゑ餅芋と具ることい唐山ゑて明の馮應京が月
令廣義ゑ曰燕都士庶中秋餽遺月餅西瓜之屬名看月
會明の田汝成が熙朝樂事ゑ曰中秋民間以月餅相
遺取團圓之義是夕人家有賞月之燕　廣東新語ゑ曰
八月蓼花水至有月則是歲多珠為大餅象月浮挂酒剝
芋三有十四種以黃為貴　南海縣志ゑ曰八月十五夜
具酒熟芋邀朋賞月　重修惠州府志ゑ曰中秋士民具
酒饌會親朋薦新芋婦女則拜月上祥兆長樂志云熟芋
去皮而食名曰剝鬼皮　清の蔣雲會が藝苑名言ゑ明
の曹學佺が蜀中詩話を引て曰有高士某中秋對月吟

云隔籬呼酒来京芋又恐鄰家索酒錢　以上の諸説本邦の看月會と相似る。

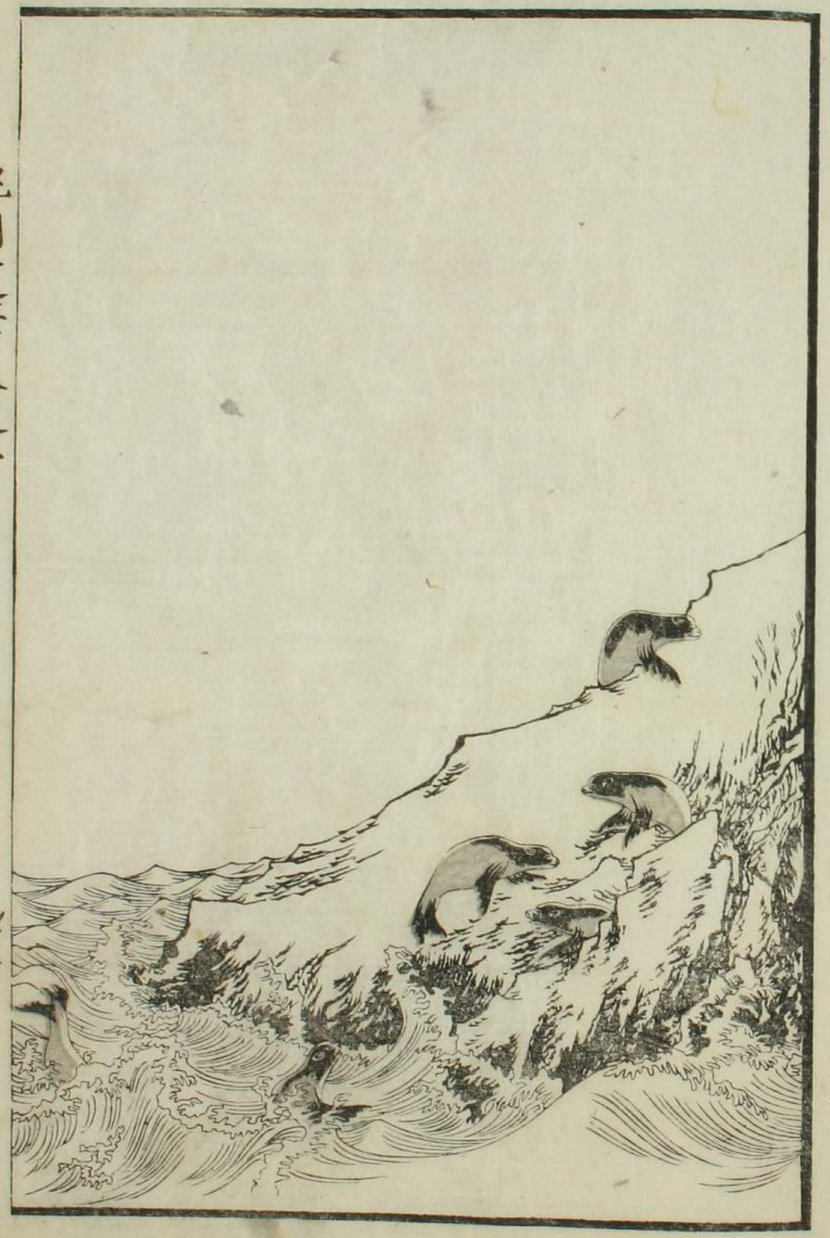
直按ずるに先年浪華にて唐山の月餅ありといふものをまゝ白麪を以て製し形圓く徑一寸七分厚さ八分許外の皮蒸餅の如く燒て鵝黄色を形に表す赤き色なり　匡郭を形し郭中に百果月餅の四字を印し中に餡あり其餡白糖に胡麻肉桂末を少し加へ酪にて和したるものなり

海獺

本州日高郡衣奈庄大引浦より地方を離ること四町許にして周圍百四十間餘の小嶋なり毎年秋の土用前後に来りて春の土用前後に帰る故に此嶋を往年より葦嶋といふ海獺は本草綱目に出る和名葦嶋和名類聚鈔○夫木和歌鈔あり伊豫にては誤りてウミラソ誤りてウミラソとも云又ウミカラとアジカとい又ウソとも云

ブロといふ小なるものは長さ五六尺大なるものは一丈二三尺に至る形圓いごとく頭小く口尖り歯牙犬の歯牙に似て目は大く耳至て小く髭粗

葦鹿嶋の圖



海獺

く長し全身短毛あり常品い其毛茶褐色なり又白色黒白雑色蒼黒色も有り左右の偏髻爪ありて末は岐あり尾い獣尾の如ふして至て小く尾を狭くして又両髻あり之を猪は爪五ツ有りて末い分きて指の如し奥州津軽にて此髻をテツピといふ又脳納獣の鰭も名け食用にすることあり此獣毎に人形きを窺ふて岩上採薬使記にみえたり出て十四五尾より多きと雌い二三十尾も群居る若人をみると雌い忽鳴て群挙て海中に飛入る一説に畫る石上に群をなして睡る中に睡ざるを窺ふもの一尾あり人をみて鳴て群を驚かし悉く海中に

飛入るといふ此説然るや否やを未だ俗諺にいふかごれよりいげる形り海中をみアシカノ番といふ行時い半身を水上に立て潮を飛て行く甚畏べき状形り鳥銃を以て打捉る皮い褥と形し或い馬具に用ひ或い荷包に製し肉を剛くして味佳なり

本草に主治を缺く東壁實鑑に曰味鹹無毒主人食魚中毒魚骨傷人及喉鯁不下者 時珍食物本草に曰味鹹甘平無毒食之消腫及瘻瘤邪氣結核骨焼灰服治鼓脹腫満 又脂い金瘡に傳て良なり

直云一説に海獺の大なるものを蝦夷にてトヾと

云といへり。又本居宣長の古事記傳ゑ書紀の海驢。此云美智ト釋日本紀ゑ海驢を海馬也と注せるハ誤ル志ゑ。出文登縣海中狀如驢常於秋月登島産乳其皮製為雨具水不能潤と何り貝原翁ハ此文をひきて ト云ゑ充る也今暫くふと云るをひき紀の國ゑ阿志加く此説ゑ去さがふ

ハ。思ふゑこ穂海驢ゑるべしといへり。按ゑトヾミチとハ同物ゑり。今も阿州ゑてハトヾをミチと

いふよし聞り。アシカとハ同類ゑして別物ゑり。形海獺より大ゑして。體ハ瘦せ。其毛淡茶色ゑして。尤右の鰭ハ。海獺よりハ短し。これをもて異とゑ此外ゑ。海豹獺虎。腽肭獸其餘海獺ゑ類ゑ海獸甚多し。別ゑ記ス。

桃洞遺筆巻之一終